

## 『風車（かざぐるま）』

Y O S S I

ただ風紋だけが拡がっている。見渡す限り遮るものが何もない、砂漠と太陽だけの世界。風が吹かなければ、音も無い。

ここ、旧クヌム神殿跡地を取り囲んだ村人たちは、老いたサヴァティエが持ち上げた旗に、すべての視線を注いでいた。

いつ、この老人が旗を振り下ろすのか……。その手が振られた瞬間、今日の最後九人目となる「公開処刑者」の首が神殿中央に斬って落とされる。「血には血を。死には死を」が、この国の法典であり、殺人を犯した罪人に「死刑」を宣告するのは、最終的に被害者の親族に委ねられていた。

いま、サヴァティエの視線の先にいる男は後ろ手を縛られて跪き、目隠しした首を前に差し出している。背後に立つ抜刀士（首斬り役人）に、いつ、生命を絶たれるかに慄きながら……。

こんな哀れな恰好をした情けない男に、息子ユーセフは殺されたのだ。五年前に病死した妻は幸せだ。一人息子の死を知らないで済んだのだから。

成人したユーセフは象嵌細工を扱う商売を始めた。村一番の市場に店を出そうとしたが、その場所取りで揉めて、この男と諍いになつたらしい。殴り倒された時に頭の打ち所が悪く、役人が駆けつけたときには息絶えていたという。男はその場で拘束され、役所の審理を経て、今日の処刑場送りになった。

最愛の息子を殺された親の気持を思い知らせてやる。溢れんばかりの憎悪に、サヴァティエは心を震わせていた。しかし……。

太陽が地平線にかかりつつある。旗を振り上げてから、どれくらいの間が経つただろう。痺れを切らせて立会いの官吏が、小声で囁きかけてきた。「おい、まだか。オレたちも早く帰りたいんだ」。サヴァティエは大きく頷いてみせたが、上げた手が動かない。

神殿に、一陣の風が吹いた。「カラカラ」。村人が息を呑む静寂のなかに、

乾いた音がしてきた。

すると、それまで身じろぎもしなかった罪人が、音のした方向に慌ただしく顔を向けようとする。群集が、一斉にざわめいた。「よしっ」。サヴァティエは心を決めた。

その瞬間、胸に激痛が走る。

くそっ、こんな肝心な時に……持病が出たのだ。「今度、大きな発作が襲ってきたら、アンタのその心臓は持たないぞ」

あのヤブ医者め、縁起でもない。男の首が刎ねられるのを見届けるまで、死んでたまるか。サヴァティエは、いまずぐカタをつけるべく、旗を振り下ろそうとした。

また、風が吹く。「カラカラカラ」

手が止まった。

サヴァティエはたまらず、群集の中に「音」を探した。村人たちの最前列で五歳ぐらいの男の子が、おもちの「風車」を手に立っている。後ろに母親らしい女性も寄り添っていた。二人の姿は、まるで小さい時のユーセフと妻のようだった。

「ナジェル!」。男が、叫んだ。

サヴァティエの心臓がドキンと高鳴った。

あの罪人は「風車」の音を頼りに、子供の名前を呼んだのだ……。

太陽が地平線に沈もうとしている。

サヴァティエは悟った。自分の生命は、もう長くない。自分が死んだら、ユーセフが生きていたという記憶も死ぬ。それは、いやだ。せめて、罪の償いに、男にはいつまでも覚えていてほしい……。

村人から、どよめきが沸き起こった。

サヴァティエが旗を上げたまま、神殿から立ち去っていきこうとする。罪人が首を刎ねられないなんて……これまでには無かった。

この国で功成り名を遂げたナジェルは末裔たちを集め、父が誤って生命を奪った「ユーセフ」という人物の冥福を、代々にわたって、祈り続けるよう、今も語り聞かせている。